

天声人語

大阪の海岸にちなむ歌が、百人一首にある。「住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路も人めよくらむ」。夜、夢の中であなたに会いに行くのに、どうして人目をはばかってしまうのだろう——。大阪の人工島「夢洲」は、この歌から名付けられた▼悲しい恋の歌に似て、夢洲も不遇が続いた。大阪で五輪を開き選手村にしようとしたが、招致に失敗した。大規模なビジネス街にする計画を立てたが、うまくいかなかつた。長い苦難の末の万博である▼2025年の万博が大阪市に決まり、夢洲が会場となる。「二度と負の遺産なんて言わせない」とは、大阪府の松井一郎知事の言葉だ。人工島がお荷物でなくなるのが、ようどうれしかつたのだろう。55年ぶりの大坂開催となる▼今となつては古き良き思い出のような前回の大坂万博だが、当時も疑問の声はあつた。「財界と政府だけが独走して、いつのまにか開催がきまり、いつのまにか会期がせまつてくる。これだけの莫大な金を、もつとましん公共交通事業に注ぎこんだら……」▼評論家の針生一郎氏が「朝日ジャーナル」に寄稿していた。高度経済成長のなか、かき消された批判かもしれない。むしろ現在の方が当てはまるか。万博を喜んでいいのかどうか、正直いって分からない▼インフラや会場の整備に2千億円ほどかかり大半は税金だという。万博が終われば、夢洲の主役はカジノに変わりそうだ。そんなテーマの裏にある現実である。

2018・11・25